

欧州を巡りて (III)

瀬木紀男

T. SEGI: My visit to Europe (III)

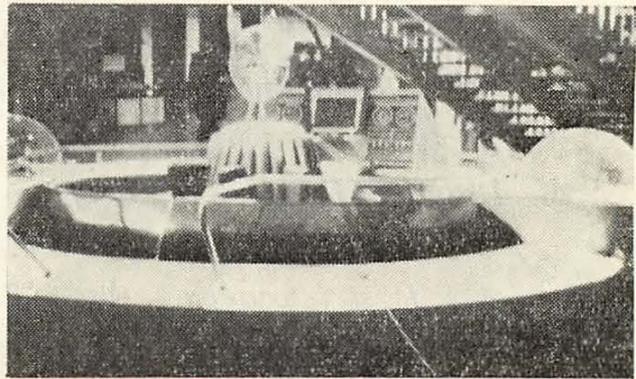
(6) 瑞典から白耳義へ

ストックホルムから5時間程、御馴染の SAS 機に乗って9月下旬ブラッセルに着くと、小国の割に大きな空港に驚いた。植物園に行き腊葉館で *Gelidium* の標本、特に *G. pusillum* (STACKHOUSE) LE JOLIS, *G. divaricatum* MARTENS 等に就いて調べた。Director の DEMARET 博士の御世話になつたが、英語がなかなか通ぜずもどかしかつた。温室の裏側は壮大な Herbarium になつて、多くの標本がぎつしり詰つている。展示室には特に desert plant の *Welwitschia mirabilis*, Kurkeik コルク (Algeria 産), 日本産木材の Sample 等があつて興味深かつた。研究室では植民地コンゴの植物を盛んに研究している。

ブラッセルでは又折良く開催中の万国博を見る機会に恵まれた。全部見ると14日間位もかかる膨大なものであつたが、之を2日間のみで主要な所を廻つた。米、英、ソ連、仏等の各館の巨大なものに比べ日本館は余りにも貧弱であつた。殊に入口上部に巨大な原爆の写真を掲げていたが、その後復興した現在の日本の写真が一枚欲しかつた。然し附属食堂の日本食に久し振りに故国の味を懐しんだ。ソ連館は巨大なガラスばりの建物で、中央一列に例の人工衛星の模型を並べ、ソ連物産品が美



ブラッセルの植物園温室
及び腊葉館 (裏側)



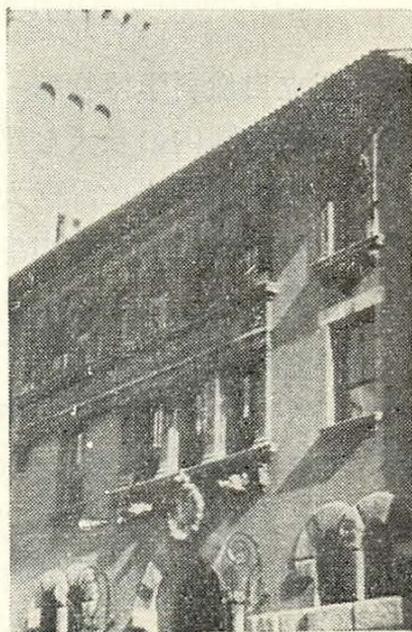
水中電波探知機を備えた円形の観測艇
(ブラッセル万国博・アメ
リカ館内の人造池にて)

しく並び、各種様々な印刷物をサービスしている。此処の二階に巨大な凍結鱒魚(チョウザメ)の標本があつた。次に米国館に一つ水産関係で面白いものがあつたので夫れを紹介しよう。それは水中電波探知機 (Sonar) を備えた円型の観測艇で、同館の池に浮べてあつた(写真参照)。海洋の水深及び魚群探知の水中レーダーを備え、1時間 18 mile の快スピードを出すというから驚く。完全なる円形のもので、どちらが船首か船尾か、一寸迷う怪物であつた。其の他チェッコ館にはお得意のガラス細工でメンデリズムが説明してあり、又 BOHUMIL NEMEC の植物組織の説明も同様にしてあつたが、特にその色彩が優れていた。モナコ館には巨大なウミヘビ及び深海産有毒魚の標本が入口に展示してあつた。

(7) 白耳義より仏蘭西へ

Sabena 機でブラッセルから1時間余飛んで、パリーへ夜中の1時に着く。空港バスがやがて凱旋門からシャンゼリゼーに入り、更にコンコルド広場一ぱいの明りの下を走る時、流石にパリーに来たと感ずる。深夜の不夜城を走つて2時頃古風なホテルに着く。今、如何にも花の都パリーに来た感じがするが、この花の意味が想像していたフレッシュなものとは違つて、クラシカルなものであつた。花という意味は「燦然たる歴史と華やかな伝統に彩られた」という意味であろう事をはじめて知つた。古い街並、街燈一つにも丹誠をこめて作り上げた底知れぬ芸術の都である。又街を歩いている大部分の人は、意外な程質素で地味な服装であつた。此処に居ると時々、ふと前世紀の街を歩いているような錯覚にとらわれる。歩いている人迄も何だか前世紀の人間の様に感ぜられる。人間の一生がほんの一瞬間の過程にすぎないように思われてならない。

ホテルには FELDMANN 氏から手紙が来ており「自分は目下ナポリに居るが、2, 3日中には帰仏するからお目にかかれる。留守中は MESLIN 氏が何でも御世話する」とあつた。10月に近くそろそろシャンゼリゼーのマロニエの葉が散りしきる頃であつた。FELDMANN 博士のいる海洋学研究所へ行く。ルクサンブール公園やソルボ

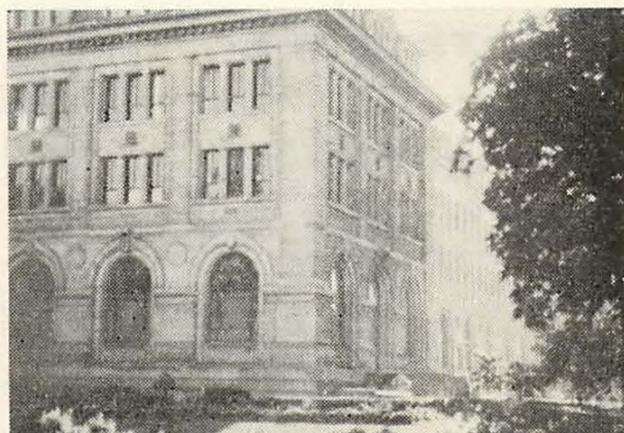


パリーの海洋学研究所

ソヌ大学に近い此処は、モナコ海洋研究所の附属で、入口に之を示す大きな標示板があつた。古い建物であつたが、中は白一色で清潔である。MESLIN 博士がカーン大学所蔵の *Gelidium amansii* LAMOUROUX の type を、私の為にわざわざパリへ迄運んでおいて下さつたので、ここで調べ得たのは非常に幸であつた(後日別報予定)。MESLIN 氏は「山田先生が初めて之を調べ、その次は君だ」と述べ、原記載のある“Dissertation sur Plusieurs Espèces de Fucus”の本を出し種々説明してくれる。FELDMANN 博士の帰仏後、色々親切に御世話になり、又多くの標本を見せて戴いたが、特に *Polysiphonia codiicola* ZANARDINI, *Gelidium fasciculatum* HAMEL 等が興味深かつた。



研究室のフェルドマン博士
(パリ海洋学研究所内)



パリーの国立自然科学博物館
隠花植物研究所

国立自然科学博物館・隠花植物研究所は此処から徒歩約20分、セーヌ河に近い植物園内の壮大な建物であつた。ダリアの咲き乱れるジョルダン・ド・ダリアのすぐ近くに、巨大なプラタナスの並木のトンネルが続き、その内を駱駝や驢馬が子供のお相手をして歩いている様は、如何にも西洋らしい。此処の二階に広大な Herbarium があり、BOURRELLY 博士が管理しておられるので色々御世話になつた。又此処にいる ARDRÈ 嬢は英語をも解し便宜をはかつてくれた。Herbarium は 1. France, 2. General, 3. THURET et BORNET, 4. MONTAGNE の4部に分かれている。研究室入口には Salle SAUVAGEAU, Salle G. THURET-Ed. BORNET の掲示がしてある。又研究室内には多くの藻類学者の写真が掲げてあり、海藻関係の文献が著者名別、アルファベット順に完備していた。此処でも *Polysiphonia*, *Gelidium*, *Pterocladia* に属する多くの標本を検したが、特に *P. subtilissima* MONTAGNE, *P. savatieri*

HARIOT, *G. latifolium* BORNET, *G. sesquipedale* THURET, *G. corneum* LAMOUROUX 等に注目し、多数の標本を調査・撮影した。

滞在中の一夜、パンテオン附近の FELDMANN 博士宅に招かれて親しみの溢れた家族の方々と共に厚遇され、又次の夜は VIRVILLE 博士宅に招かれた。VIRVILLE 博士は海好きの学者に相応しく、御自慢の「海の部屋」には海に関する種々の蒐集品が飾られ、書齋は莫大な書籍で埋まり、玄関には中世の騎士の甲冑が飾られて、宛も家全体が Museum の様な感じである。さすが葡萄酒の本場だけあつて、次々と幾種類もの葡萄酒を出されたのには驚いた。

パリー及びその近郊にはルーブル、凱旋門、エッフェル塔、ヴェルサイユ、フォンテンブロー等訪れる所は余りにも多い。エッフェル塔附近のシャイヨー宮にある海洋博物館には、種々面白い展示があつたが、就中巨大な潜水服が興味深かつた。又此処の水族館はあまり大きくはなかつたが、真紅の外腮と四つ足を持つたメキシコ産・山椒魚 (Axolotl) の奇妙な形態に思わずみとれ、シャッターを切る。又大学都市へ行き、日本学生会館を訪問した。日本風の建物ですぐわかり、広間には藤田画伯の巨大な絵があり、又図書館には日本の書籍がずらりと並び、久し振りに多くの日本文字を見て非常に懐しかつた。

レストランで名物の牡蠣を食したが、注文して持つて来たものは意外にも生牡蠣であつた。皿の上に *Fucus* を敷き、その上に生牡蠣がのせてある。之にレモンの汁をかけて食べる。なおこの地では牡蠣の輸送に *Fucus* を使うらしく、店頭で *Fucus* の上に並べてある光景や、籠の中に *Fucus* と牡蠣が一緒につまつている所等をよく見かけた。

(8) 仏蘭西から瑞西へ

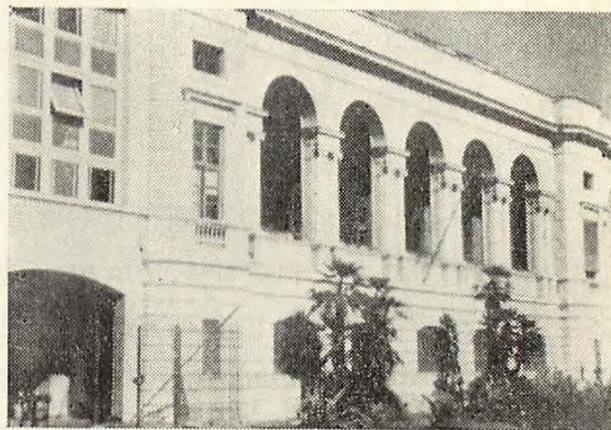
パリーから Swiss Air 機で2時間程飛んでチューリッヒに着く。湖畔で淡水産の藻類を採集する。此の美しい町には可成り多くの日本人が居り、在外邦人の生活を現実に見て色々参考になつた。日本人ではないが、北大で長らく教鞭をとつておられた KOLLER 教授未亡人が、ホテルのすぐ前に住んでおられるので訪ね、その娘さん(スイス人で子供の頃札幌にいた)と日本語でお話出来たのは印象的であつた。チューリッヒからユングフラウに向う途中、首都ベルンで一泊したが、その美しい風光は全く絵の様であつた。ユングフラウ行の登山鉄道は上部に行くに従つて線路の幅が狭くなるので、途中で2、

3回乗りかえた。終点は洞窟内に作つてあり、如何なる天候の日にも好都合に出来ている。幸い頂上では時々晴れて崇高な Mönch を望む事が出来た。壮大な氷河にアルプスの靈感をまざまざと感ずる。帰路インターラーケンで朝早く、牧場の牛の一群がとて面白い音の振鈴を首につけて、一人の少年に率いられてゆくのに出会つたが、如何にもアルプスらしい牧歌的風景であつた。ふと10有余年の昔、札幌で雪の夜聞いた馬櫓の澄んだ鈴の音が、連想されてならなかつた。

(9) 瑞西より伊太利へ

Swiss Air 機で2時間余飛んでローマに向う。アルプスを越えてローマに着くと、10月中旬というのにさすがに小暑く、太陽の光も強烈である。冬服をぬいで久し振りに夏服を着る。ローマは市全体が遺跡と言つてよい位多数のものがある。フォロ・ロマーノ、ビクトルエマヌエル記念塔、バチカン、カタコンベ等々何れも歴史的興味に満ちたものであるが、英語があまり通じないと、タクシー料金の減茶苦茶であるのには閉口する。

ナポリの Zoological Station に行くと、恰度留学中の北大山田真弓先生に色々御世話になる。先生はイタリー語が極めて上手であるので大変心強かつた。又此処は図書が非常に完備している事に驚いた。この辺の海藻はドイツの故 FUNK 博士によつてよく調べられている。研究所附近では海藻採集はかなり困難であつたが、マルキ



ナポリの Zoological Station

アロへ行き *Gelidium*, *Fucus*, *Pelvetia* 等を採集した。研究所には北大内田教授が居られたが、この他海藻関係の BETH 氏に会い培養中の海藻を見せてもらつた。 *Acetabularia*, *Halimeda*, *Gracilaria*, *Valonia*, *Anadyomene*, *Dictyota* 等が綺麗に培養され、又 *Vidalia volubilis* (L.) J. AGARDH を少し戴いた。猶、培養器は均等に光と温度がゆく様に工夫され、内部は蛍光灯が一本中軸に入り、四面鏡で蔽つてあつた。この中に棚が沢山作つてあり、この器全体が恒温室に入れられてあつた。又此処の水族館には水槽中にイカ *Loligo vulgaris* が遊泳している点、又本物の海藻が入れてあつた事は、他

に例があまりなく面白かった。

又ナポリではポンペイの廃墟を訪れたが、此処では特に Fish Market の跡に注目した。広場の一隅に上部アーチ型になつた小間があり、この辺からは魚の鱗や庖丁等が多く発掘された由、今から 2000 年前既にこの様なマーケットがあつたかと思うと感慨深かつた。ナポリ滞在中の一日カプリ島へ行き有名な青の洞窟見学後登つた島の頂上に、大きな土産物店があり、此処のショー・ウィンドウの真中に、日本産真珠の標品が箱に入れ堂々展示してあつた。

(10) 伊太利より帰国へ

最後の SAS 機に乗つてローマを後にし、南廻り近東諸国を経て帰国の途についた。途中北アラビアのシリア沙漠上空で恰度黎明が訪れ、朝雲たなびく下界の東天に、真紅の太陽が上る壮厳さは筆舌に尽し難い。次第に明るくなると見渡す限り沙漠地帯、僅かに細い道路が糸の様に延々と続き、自動車は蚤の様に後に砂埃をたてて走る。イランに入ると皜々たる岩山が続き、緑色のものは何一つ見えない。続いて藍青色のアラビア海に見とれている中間もなくカラチ着陸。沙漠と砂塵の街、暑くて氣息奄奄、土人が飛行機の整備をする。スチュワーデスが富士山と鳥居の絵のついた絹ばり団扇を渡してくれる。次いで印度に入ると灌漑が行届き、青緑色の木が見えはじめる。夜となつてバンコック着陸。なま暖かく、立派な空港で少憩する。機上で第二夜が明け、水田地帯が見えだしたと思うとマニラ着陸、いよいよ祖国日本に近づく。此処から太平洋を一路北上、雲中飛行を続け何一つ見えない。7 時間程後、雲の隙間から突然伊豆半島が見えはじめた。狭く建てこみ、ごちやごちやした町並、溢れた川に木材が一ぱい浮いている。間もなく東京湾の海苔場が見えたと思うと、突つこむようにランディング。冷雨に煙る羽田に無事着いてほつとした。(完)

(三重県立大学水産学部)

Dr. FRANZ MOEWUS, Prof. CURT HOFFMANN
及び Prof. GILBERT M. SMITH 三博士の訃

昨年は春から夏にかけて著名な 3 人の藻類学者の訃が報ぜられた。即ち 4 月にはクラミドモナス科の諸種等の研究で有名なアメリカ合衆国マイアミ大学の FRANZ MOEWUS 博士が 50 歳で急逝され、6 月には海藻の生理、生態、利用等の方面に造詣の深かつた、独乙キール大学の教授で同附属海洋研究所